

# SHOW HEY シネマルーム

★★★

## 海辺の家

2002 (平成14) 年7月26日鑑賞

Data

監督：アーウィン・ウィンクラー  
出演：ケビン・クライン/クリス  
ティン・スコット＝トーマス/  
ヘイデン・クリステンセン/  
ジーナ・マローン

### 👁️👁️ みどころ

「あと3ヶ月の命」と宣告された父は、自分が最もやりたかったこと、すなわち「海辺の家」の建替えを決意。建替え工事に無理矢理息子サムを参加させることにより、失われた「父子の絆」は果たして取り戻せるのか……。明確なテーマをもった珠玉の作品で美しい。しかし、本当に根底から崩壊してしまった日本の家庭の参考になるのかどうかは少しギモン……。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <古くて新しいテーマー「父子の絆」>

この映画のテーマは「父子の絆」。42歳の父親ジョージ・モンロー（ケビン・クライン）は、建築事務所に勤める建築デザイナー。従って、この映画では、「父子の絆」というテーマは、「わが家の建替え」をめぐる展開する。

面白いのは、その「わが家」はニュータウンの中にある一戸建ての建物ではなく、大海原をのぞむ岸壁の上に建てられ、ジョージの父親から引き継がれた因縁つきの家であること。もっともジョージの家の周囲にはたくさん家が並んでいる。隣家には、立派な芝生つきの庭をもった大金持ちのA氏がいるし、また向かいには16歳の娘アリッサ（ジーナ・マローン）と2人で暮らす女性コリーン（メアリー・スティーンバーゲン）もいる。A氏は、変わり者のジョージの愛犬が、A氏の車に小便をかけたか、芝生を荒らしたりすることで、いつもジョージを苦々しく思っている。またコリーンは、ジョージが朝、岸壁の上から海に向かって立ち小便をする姿を娘のアリッサが見ているのを見て激怒し、ジョージに抗議。もっとも、ジョージとコリーンの会話を聞いていると、二人の間には何かいやく因縁がある様子……。

## <不器用人間の父親ジョージ>

ジョージは、自分も、父親と良いコミュニケーションをつくれなかった。だからずっと父親を憎み、また住んでいるその家を嫌いながら42年間を生きてきた。自分の父親とうまくつきあえなかった、そんなジョージはちょっと変わり者。当然、不器用な男だ。仕事でも、今はみんなCG（コンピューター・グラフィック）を使って依頼者にテキパキと建物のイメージを説明し、実績をあげているのに、ジョージだけは今でも手作業で建物の模型をつくっている始末。従って、仕事は全然はかどらず、依頼者のニーズにも応えられない。

また結婚生活でも、自分が惚れて結婚した最愛の妻ロビン（クリスティン・スコット＝トーマス）との間に息子サム（ヘイデン・クリステンセン）をもうけながら、結婚生活はうまくいかず離婚する羽目に。

## <反抗的な息子サム>

そしてサムは今16歳。ジョージが子供だった頃と同様、いや、それ以上にサムと父親ジョージとの関係はうまくいっていない。男のくせに顔には化粧。さらに、耳ばかりか、唇にまでピアスをつけた異様な顔。部屋は年から年中内側からカギをかけ、その中でクサヤシンナーを吸い、音楽をガンガンかけている。外ではいつもヘッドホーンで音楽を聴いているだけ。何もしようとしない。当然、父親とは口もきかない。怠惰で虚無的かつ反抗的で、どうしようもない若者になっていた。

今の日本の若者にも、こういうヤツはいる。うじゃうじゃ、ゴロゴロ、いっぱいいる。しかし、サムは意外(?)に女の子には興味を示さない。サムの悪友の男の子C君は、女の子をひっかけたり、「変なバイト」（このバイトの内容は後になって、映画の中で意味シンに理解できる）で金を稼ぐことに精を出しているが、サムはオクテ。向かいのコリーンの娘アリッサがモーションをかけてきているようだが、サムはそれに全然乗っていかない。その点では、臆病なのか、それとも本当は割と真面目なのか・・・？

## <離婚した母ロビン>

離婚した母親のロビンは、「母親は息子に甘いものだ」と、サムについては今や完全にサジを投げ、ジョージが父親として息子との関係をうまく再構築してくれることを期待するのみ。美しいロビンは今はジョージとは全く違うタイプの男性B氏と結婚し、子供も2人もうけている。B氏は、高収入を得ていることを自分の自信として、妻を愛し、家庭を愛している。だから、ロビンは当然幸せいっぱいはず。しかしB家でも、幼い子供たちとのスキンシップ不足で積極的に「ハグ」しようとならないB氏をロビンは少し不安に思っている。B氏の家庭にも不協和音の芽生えがあった・・・。

## <突然のリストラ—そして死の宣告>

ある日、ジョージはいつものように自分のデスクで模型をいじっていた。そこへ上司から突然の呼び出し。ジョージは、大きな吹き抜けがあり、通路にたくさんの模型が並んだ建築事務所の中を歩いて上司のデスクへ。

この吹き抜けと、通路にたくさんの建物の模型の並んだ建築事務所は、どこかで見たことのあるイメージだと思ったら、これはつい最近の6月頃、BS放送で放映された「世界へ‘ANDO’からの発信—安藤忠雄の建築世界地図—」で見た、大阪出身で今や世界的に有名な建築家である安藤忠雄建築事務所とよく似たイメージ。びっくりした。本当によく似ている。何か関係があるのかな・・・？

それはともかく……。上司に呼び出されたジョージは、明確な解雇通告を受けた。CGの時代に手づくりの模型は時代遅れ。また依頼者の仕事を、「今日からやります」では話にならない、とのこと。これは、「ある意味では当然」、と多くの事務員を使って法律事務所を経営している私も納得。もっとも、この上司の努力により、ジョージの退職金は20週分のところを26週分にアップしてくれたとのこと。さあ、ジョージはどうするか？

ここらがアメリカ流。よくある日本の「クビ切り劇」のようにメソメソしていないし、グズグズしていない。ほんの二言、三言でジョージは納得。「それでは……」と言って握手を交わす。さすが、アメリカ人。話は合理的で結論は早い……と思っていたら……。実はジョージは全然納得していなかった。何かを決意したジョージは、突然、鉄の棒を持ち、まずは自分のデスクの上の模型を叩き壊した。それのみか、建築事務所の通路にズラッと並んだ、たくさんの立派な模型を、次々と鉄の棒でプチ壊していく。これは弁護士の私から見れば、明らかな器物損壊罪、威力業務妨害罪に該当する犯罪行為だが、気が狂ったように暴れ狂うジョージを誰も止められない。「君は最低の男だ」と告げる上司が手に持つ模型まで、ジョージは鉄の棒で粉砕。そして、スカッとして(?)建物の外へ。

ところが、そこでジョージは突然倒れこんでしまった。

ジョージはガンに侵されていたのだった。そしてジョージは自分の命があと3カ月しかないことを宣告されてしまった。

ジョージは、その時看護婦に対して、「君がもしあと3カ月の命だと言われたら、何をやる？」と質問。すると、ジョージの気持ちを察した看護婦は、明るく「私ならおいしいステーキを腹いっぱい食べる」との答え。果たしてジョージの答えは……？

それは、はっきりしていた。

そう、ジョージの答えは、「自分の家を建てること」だった。

## <最後の決断—我が家の建替え>

ジョージは、夏休みを友人と共に遊んで暮らすつもりの方の計画を無理矢理中止させた。「説得」なのか「無理強い」なのかよくわからないが、とにかく強引にサムの方の計画を中止させた。ここらあたりもアメリカ的だ。日本では、今、ここまで反抗する息子を父親はまず抑えることはできないだろう。息子は家を出ていけばいいだけ。泊めてくれる友人はたくさんいるだろうし、適当にバイトをすれば、夏休み位は十分に過ごせるだろう。

しかしアメリカでは、今でも父親の権威は、子供が高校生頃までは「絶対的？」なものとして存在しているらしい。そうでなければ、夏休みの計画を中止させたり、ガレージ内のベッドで父親と一緒に寝たり、仕切りのないシャワーを使って生活したり、そして旧建物を解体し、新建物を建てていく作業に嫌がる息子を無理矢理「参加」させることなど、とてもできないはずだ。

一人黙々と建物の解体作業を続けるジョージ。コリーンとアリッサはそれに興味を示し、サムにシャワーを提供したりして協力する。しかし、A氏はうさんくさげにこの工事を見つめ、「監視」を続ける。

サムは、「絶対に協力しない」と言っていたものの、毎日黙々と働く父親を見つめているうち、「1時間10ドルだよ」と言って、アルバイト料を名目にして解体作業へ参加する。また離婚した妻ロビンも、昼間ほとんど家にいない夫を放置して、小さい子供たちを連れて毎日ジョージの家の建替え現場へ「ランチ」を運び、また建替え作業にも参加する。

このような「わが家の建替え」作業の中、ジョージとサムとの「父と子の交流」、そしてジョージとロビンとの「男女の気持ち」の交流が次第に深く、濃くなっていった。

## <名曲「青春の光と影」にのったダンス>

背中が痛みが次第にひどくなり、倒れこんだオヤジから、「実はオレは病気なんだ。近々死ぬんだ」と告げられた息子。その息子サムは、さまざま心の葛藤を経ながらジョージと「ハグ」をする。またようやく柱の建ちあげが完了した頃、夕暮れの中、ラジオの音楽を聞きながらジョージとロビンは、二人が愛し合っていた時のことを語り合った。ジョージは心の底からロビンを愛していたことを率直に告白する。また、ロビンも「一緒に住んだ6年間。辛かったのは2年だけ。それはあなたに夢中だった最初の1年と、愛が冷めてしまった最後の1年だ」と告白する。

そしてロビンはジョージをダンスに誘った。

スローテンポの音楽にあわせて踊る二人。何ともいえない美しいシーンだ。そのうえ……。何とその曲は、私たちの世代の、高校生から大学生の頃にかけて流行った、あの「青春の光と影」だ。「ジョン・パエズ」と並ぶ有名なアメリカの女性フォークシンガー、「ジュディ・コリンズ」が歌ったあの曲を、スローバラード風に編曲したものだった。

後で調べたところでは、この「青春の光と影」は、今も活動している偉大な女性シンガー

ーソングライター、「ジョニ・ミッチェル」が発表したもので、1968年にジュディ・コリンズが歌って全米8位の大ヒットになった作品とのこと。

このように、死の宣告を受けたジョージの決断による「わが家の建替え」作業の中、今まで失われていた父と子、そして離婚した元妻との気持ちの交流が深まっていった。

## <二つのエピソード>

この間に発生するいくつかのエピソードも、人間臭くて面白い。

その1つは、アリッサの母親コリーンとサムが悪友C君との秘密の「情事」。偶然のチャンスから娘と同世代の若者C君をベッドに引きずりこんだコリーンも、そしてその相手役C君もその「蜜の味」を忘れられない。そのためC君は、再びジョージの家の向かいにあるコリーンの家（コリーンのベッド）に忍びこもうとするが、運悪く、建築作業中のサムらに見つかり、やむなくその作業の輪へ入ってしまう。ベッドで待っているコリーンは、すぐに来ると言ったのになかなか現れないC君のケイタイにTEL。ところが屋根の上へ上がっていたC君のケイタイをたまたま手にとったのは、ケイタイの近くにいたジョージだった。コリーンはそのケイタイに向かって、「何をしているの！ベッドで待っているのよ！早く来て！」と叫んだ・・・。

2つ目は、ジョージの建築に文句をつけるA氏。

ジョージは建築事務所に勤務していた建築のプロ。従って、私が約20年間、興味を持って取り組んでいる「都市法政策」を十分に知り尽くしており、日本で言う都市計画法や建築基準法関連法規はすべて熟知し、遵守していた筈。ところが……。何かの手違いで建物の高さが20cm高いとA氏から文句が出た。既に柱は建ち終わっている。今変更すれば、完成は3カ月も半年も遅れてしまう。ということは既にジョージの命はなくなってしまっている、ということだ。

アメリカの建築基準法関連法規は私はよく知らないが、ジョージがガレージを仮住居として使用しながら建物を解体している時、「シャワーには壁がないとダメ」。「〇〇には窓がないとダメ」etc、近所からの苦情を受けて警察官がいろいろと言ってくる姿を見て、「なるほどナ」と勉強になった。高さ制限もあり、これらに違反していれば罰金になれば敗訴確実、また莫大な賠償金をとられるらしい、こともよく理解できた。

ところが、このA氏からの苦情を見事に処理したのはサム。サムが悪友のC君に誘われて、無理矢理「変なバイト」をしていた時に見た、「お客」である高級車の持ち主がA氏だったのだ。この話をちらつかせたサムに対して、A氏はすげすげと降参し、退散した。

## <ついにジョージの命は・・・>

このようなさまざまな人間模様を見せながら、ジョージの建物は次第に完成に近づいて

いった。

しかし、背中痛みがひどくなり倒れこんだジョージは、病院に収容され、建築作業に参加できなくなった。しかしその後は、コリーンからの資金の援助とサムを中心としたスタッフの手により、建築作業は順調に進んだ。そしていよいよ建物が完成に近づいた頃、ジョージは静かに一人で病院のベッドの上で息を引きとった。

### <三人の俳優達>

主役の、頑固な父親を演ずるのは、アカデミー賞の受賞経験をもつケビン・クライン。彼は、①突然のリストラ通告を受けた中年男、②死の宣告を受けてはじめて家の建替えを決意するいかにもアメリカ的な強い意思をもった父親、③父子の絆の切断に悩みながらも、残された短い時間の中でひたむきに息子へのメッセージを送り続ける父親、そして④今も別れた妻を愛していることを実感しながら、それをあえて伝えようとせず、現在の彼女の家庭や幸せを守ろうとするやさしい夫。

こんな「渋い」男をケビン・クラインは見事に演じている。

次に、反抗的でひねくれ者だが、どこかに「純」な気持ちを持った息子サムを演ずるヘイデン・クリステンセンは、『スター・ウォーズ エピソード2/クローンの攻撃』で、ジェダイ騎士のアナキン・スカイウォーカー役に大抜擢された若者。

耳や唇にピアスをつけた異様な姿のひねくれ者が、突然の父親のガン宣告、そしてワケのわからない我が家の建替え作業に巻き込まれていく中で、次第に人間としての率直な気持ちに目覚め、また父親への理解を深めていく姿をみずみずしく演じており、好感が持てる。

そして、ジョージの別れた妻ロビン役は、1997年の第69回アカデミー作品賞を受賞した名作『イングリッシュ・ペイシエント』ですばらしいイギリス人の人妻「キャサリン」を演じた、クリスティン・スコット＝トーマス。この映画は私の大好きな作品だし、この女優は私の大好きな女優の一人だ。

もともと、『イングリッシュ・ペイシエント』で見せてくれた人妻キャサリンの美人ぶりや何ともいえない色気に比べると、『海辺の家』での役作りは少しフケた人妻になっており、女性としての魅力は少し落ちている感じがして少し残念だったが・・・(これはもちろん私の独断と偏見です・・・)。

しかし、『青春の光と影』の曲をバックにしてジョージと二人で踊るシーンでは、やはり彼女の優雅な美しさが見事に表われていた。美人女優「ニコール・キッドマン」ほど派手ではないが、私としては、今40歳を少し過ぎた年齢となった彼女の魅力をたっぷり発揮できるような作品を是非望みたい。

この主役の三人をはじめ、脇をかためる俳優たちがそれぞれにいい味を出しており、申し分ない布陣となっている。

### <おわりに>

学級崩壊。親子断絶。キレる若者たち……。

日本での親子のコミュニケーションの欠落や教育問題の危機、そしてその解決方法の模索の必要性は明確だ。しかし今、残念ながら、その明確な処方箋は描かれていない。

この作品は、「我が家の建替え」を通して、「親子の断絶の建て直し」というテーマを描くものだが、日本人にも十分に理解でき、かつ通用する価値観を、説得力をもって示している。

是非多くの日本人、とりわけ教育関係者に観てもらいたい。本当は父子二人で観るのがベストだが……。

配給会社も、こんな作品については特別の制度として、父子二人での観賞の場合は2人で2000円とかのサービスをして売り込めばいいのに、と思うがどうだろうか……？

2002（平成14）年8月3日記